

## IV 生産・流通・販売の一体的推進

## かき「太天」の産地化に向けて

東予地方局産業振興課産地育成室

西条市周桑地区では 534 戸が 150ha でかきを栽培しており、県内でも有数の産地となっています。近年、かきの販売価格が低迷する中、当地区では、大果で糖度の高い新品種「太天」を導入し、現在、6ha で栽培しています。

高級かきとしてブランド化を目指しており、産地育成室では新品種の生産から流通販売にいたる支援を通して、産地の活性化に努めています。

### 基礎的高品質生産技術の普及

太天の生産安定と品質向上を図るため、産地育成室ではモデル園を設置し、J A や果樹研究センターと連携して、生育データの蓄積や適正着果管理等の技術を実証しています。

また、各種技術講習会の開催や病虫害除指導等により、栽培技術の早期普及定着を図っており、正品率は 80%以上と大幅に向上しています。



モデル園でのせん定講習会



脱渋果実の食味調査会

### 脱渋方法の検討

太天は、渋柿のため脱渋処理が必要です。そのため、関係機関が連携し、2通りの脱渋法（CTSD 脱渋法と樹上脱渋法）について、処理時間や脱渋後の食感、日持ち性等を検討し、適正処理方法や問題点を明らかにしました。

### ブランド化の推進

太天の有利販売につなげるため、産地育成室が主体となって管内 2 J A と出荷規格の統一について検討し、新しい出荷規格（暫定版）を運用することができました。

平成 24 年産は、約 9 t を出荷し、販売額は約 600 万円となりました。今後は認知度を高め、高級果実として更なるブランド化を図っていきます。



好評を得た特選品（3玉入り）

## 「おちいまばりの花」ブランド産地の確立

今治支局産地育成室

管内は、約 20 品目の花き類を生産している産地ですが、単価低迷や高齢化等で生産量は伸び悩み、産地の活性化が課題となっています。そこで、JAの重点振興品目(トルコギキョウ、キンギョソウ、枝物)を中心に生産数量・生産額の拡大を図り、市場との連携を強化しながらブランド産地の確立を支援しています。

### 枝物の推進

新規導入のビブナム等枝物の栽培者を確保するため、6か所で栽培講習会・挿し木講習会・圃場巡回を通じて啓発を行いました。また、適切な育苗を推進するとともに、苗の供給についても負担の少ない方法を検討しています。

また、シキミは樹形改造と園内作業道の設置を推進し、栽培管理方法の徹底を図るなど、生産量の確保を支援しています。



花木挿し木講習会



切り花フェアでフラワーアレンジ

### 消費者・市場との交流

秋と冬に直売所「さいさいきて屋」で切り花フェアを開催し、生産者が直接販売現場に立ち会い、消費者に我が家の花を紹介しています。

また、来場者による品評会審査で、消費者の目線に立った感覚を持つとともに、フラワーアレンジや花束づくりを通して地元の花の消費拡大を支援しています。出荷協議会では、自分の花を持ち寄り、各市場との話し合いの場を設定しています。

### 各種研修会、圃場巡回で技術の向上

伯方地区と松前町で開催した種苗会社の品種検討会への積極的な参加を呼び掛けました。有望品種の説明を直接聞くことができ、生産者は営農計画に活かすことができました。

また、県内他産地の生産者と交流するとともに、キンギョソウ等の推進品目については月1回の圃場巡回を通して技術の向上をめざしています。



キンギョソウ等の圃場巡回

## 日本一の「紅まどんな」産地を目指して

中予地方局産業振興課産地育成室

中予管内は、全国的にも有名な中晩柑（いよかん、不知火など）の産地ですが、近年は既存品種の価格が低迷しており、新たな品種への期待が高まっていました。そこで、県が育成した「紅まどんな（愛媛果試第28号）」に着目し、産地化を図っています。

「紅まどんな」は、果肉がゼリーのようにとろける柔らかさで、年末贈答需要期に出荷・販売ができます。しかし、果皮障害の発生や夜蛾による果実の吸汁被害など、栽培上の課題も多くあり、産地育成室ではJAと連携してこれらの課題解決や栽培技術の向上を支援しています。また、販売面では「紅まどんな」の消費者への認知度向上対策等を支援して、ブランド力の強化に努めています。

### 雨除け栽培の推進

「紅まどんな」は、果実成熟期に雨にあたると果皮のひび割れや黒変が発生します。

そこで、簡易ハウスを考案し、雨除け栽培で降雨を遮断する方法を推奨しています。この簡易ハウスは比較的安価な経費（100万円/10a程度）で建設できるため、急速に普及し、現在では栽培面積76haの内、32haが施設栽培となっています。



簡易ハウスによる雨除け栽培



高品質に仕上がった紅まどんな

### 販売促進活動

新品種の「紅まどんな」をPRするため、東京・大阪のデパートや県内の大手量販店での試食販売を実施しました。試食されたお客様からは「こんなに美味しいかんきつは初めて食べた」と好評でした。

その他、松山空港での果実の無料配布やインターネットを利用した広報活動も行い、認知度の向上を図っています。

### 高品質生産技術の普及

贈答需要に即した大玉かつ高糖度な果実を生産するため、摘果時期・摘果方法の技術や、糖度を上げるための節水管理（土壌水分抑制管理）などの技術向上を支援しています。

また、出荷時期が12月の約1ヶ月間と短いことから、加温栽培にも取り組み、県内で唯一11月からの出荷・販売も行っています。



デパートでの試食販売活動

# 全国初！ブラッドオレンジの産地化

南予地方局産業振興課産地育成室

南予地方局管内では、平成 21 年度から 23 年度にかけて「ブラッドオレンジ産地化確立事業」により、ブラッドオレンジ栽培研究会と加工研究協議会を立ち上げ、関係機関が支援して、①栽培・貯蔵技術の確立、②加工品の開発・商品化、③消費者へのPR活動などを強力に推進してきました。その結果、栽培面積 22ha、生産量 87t、栽培者 317 名に拡大し、加工品も増加中です。また、生産農家が 6 次産業化に取り組んだり（商品化検討）、耕作放棄地にブラッドオレンジを植栽する新たな動きも見られています。

## ブラッドオレンジの栽培技術確立

栽培研究会が中心となり、赤色素のアントシアニンの安定化のため、マルチなどの実証圃の設置、みかん研究所との連携、会員間の情報交換を行っています。

また、農林水産研究所の研究成果を活用して、光センサーの選果ラインで着色の判別が概ね可能となり、均一な果実出荷ができるようになりました。



アントシアニン増強のための栽培実証



マスコミを活用した PR

## 消費者へのPR・マスコミ活用

平成 25 年 4 月には第 2 回・ブラッドオレンジフェアを開催し、果実の試食・試飲、加工品の販売などを行い、約 1,500 人の来場者がありました。ブラッドオレンジを使った加工品も 30 品目を超え、増加しています。

また、関係機関に働きかけ、積極的にマスコミを利用して県内・外へのPR活動に努めています。イタリア料理店、和・洋菓子店を中心に利用され、リピーターも増加しています。

## 耕作放棄地対策・6次産業化支援

吉田町の農家が耕作放棄地対策事業を活用して、新たに 43a でブラッドオレンジを植栽しました。最近是一般企業からの要望の強いモロ種の植栽が多くなりました。

また、農家の 6 次産業総合化事業を支援して、検討会を開催し、現在 11 品目について商品化を検討中です。

平成 24 年 11 月にはブラッドオレンジを利用した缶チューハイが全国発売され、好調に販売されました。



6次産業化への取組み

# 県育成いちご品種「あまおとめ」の着色技術向上と販売力強化

八幡浜支局産地育成室

西予市管内では、いちご生産者 33 戸のうち 20 戸が県育成品種「あまおとめ」を導入し、220 a で栽培しています。

「あまおとめ」は極早生で収量が多く、大玉で秀品率、糖度ともに高い品種ですが、果実の着色が遅い特徴もあり、厳寒期の低温・寡日照が深刻な管内では、着色促進が栽培上の課題となっていました。そこで、産地育成室では可動式光反射シートを活用した着色促進技術を新たに開発し、現地実証を行い技術の普及に努めています。

## 光環境改善による着色促進

着色促進を図るため、高設栽培の栽培ベットの側面に可動式光反射シートを装着することにより果実の着色が向上することを実証し、生産者への導入をすすめました。

果実の赤みが増すほか、糖度の上昇や収量向上の効果が期待できることもわかり、本技術を「いちごの可動式光反射シート」として J A と共同で特許出願を行っています



可動式光反射シート設置状況

	対照	可動式	固定式
赤色示数	20.0	26.9	22.2
価格 (円/kg)	平均	233	247
	I氏	260	270
	S氏	220	240
	K氏	220	230

※赤色示数が高いほど赤みが強い  
価格評価

## 市場の評価上々

市場のいちご担当者と仲卸業者に光反射シートの可動式区と下垂固定区、装着しない区のいちごに価格をつけてもらいました。結果、可動式区は下垂固定区に比べて kg あたり 67 円高く、光反射シートなし区のいちごに比べると 113 円高い評価となりました。

また、買い物客へのアンケートでは、可動式区がおいしいとする人は全体の 3 分の 2 に達しました。

## 実証圃の設置と展示会の開催

実証圃場において生産者や関係機関等を招いた展示会では、可動式光反射シートを動かし、操作性や光の照り返しの状態を参加者に確認してもらいました。

可動式光反射シートに関する参加農家の関心が高まり、現地普及に向けた下地作りの一つとなりました。

今後も実証圃の調査を継続するとともに、次年度に向けて、「あまおとめ」栽培農家の技術力向上を支援していきます。



実証展示会においてアピール